



【現代語訳】

打つ太鼓の音も澄み渡っているよね。角兵衛獅子、角兵衛獅子だよと、ご当地に招かれて、やって来ましたよ！

さあ、ここに居ながらにして、清涼山に渡る有名な石橋の所で、文殊菩薩が遣わした獅子が舞うのを、お見せするよ。

おいらは角兵衛獅子で浮世を渡っている、風雅者（大道芸人）さ。

歌うのも、舞うのも、お囃子をするのも、一人でやって、一人

旅の野宿は草を枕とするのよ。でも、故郷には女房がいてね、

まあ、自分の女房を褒めるわけじゃないが、ちゃんと御飯を炊

いたり、水仕事をしたりしてくれる。朝と夜は、いつも一緒に

麻を撚って楽しいよ。ああ、朝、夜の毎にするアレの楽しみも

旅で思い出して、獨りニンマリしながら、ご当地にやって来た

というわけ。

潟の路を越えようと越後だが、お国名物は何かって？ まあ、

様々あれど、何と言っても「田舎訛りの変な言い方」かなあ。

例えば、「憂き晴らし」は「しらうき」（発音が倒置している）と云う

し、そんな旅の憂き晴らしを書いた手紙を、故郷に飛んでゆく

雁に託して、届けて欲しいもんだよ。

その次は、「小千谷縮を着ると、どこやらが透けて見える」という見え透いた話しは、越後の国ではよく聞く話さ。更に変

なのは、夫婦の縁を結べば、男は「兄やさん」と呼ばれるの。

ああ、あ、それって、兄じゃなくなつて夫のことだからさ、

変なだけどね。

来るかな、来るかな、と浜に出て見るのだけれどホイノ、

浜で待つのは松風ばかりで、風音が強くなってきたわ・・・

やっと駆け付けて来た！ホイノ「待っていてくれるかな」と。

好きになった男、好かれた女の逢瀬はホイノ、

心は急きつき（石竹）、気は早や、揉みじ（紅葉）だね、

やっと駆け付けて来た！ホイノ「待っていてくれるかな」と。

恋の辛苦も、歌の甚句も、「おけき節」で歌い流そうよ。

補注、

おけき節

小千谷に住む老婆の愛猫が、飼い主の困窮をみて「お柱」という名の女に化身し、

その身売りの金で恩を返し、売られた先の廓で美しい声で歌い、人気を博したと

いう説話が、越後民謡「お柱さん節」（おけき節）の由来と云う。

なあんか、愚痴だよ。牡丹は持ってなんかいいしき、越後の獅子は。だから・・・

己の姿を（牡丹の）花と見立てて、庭に咲いたり、咲かせたり

と、一人で舞を舞えば、

そのオネイチャンに、気があるようなこと言われてさ、

一晩中眠れずに、夜が明けるまで待っていたよ。

来てよ！一緒に話しましょうよ、この小松の陰で。

松の葉のように細やかに、イチヤイチャしながらさ。

もひとつ、

己の姿を花と見立てて、庭に咲いたり、咲かせたりと、

一人で舞を舞えば、

そのオネイチャンに、気があるようなこと言われてさ、

一晩中眠れずに、夜が明けるまで待っていたよ。

来てよ！一緒に話しましょうよ、この小松の陰で。

松の葉のように細やかに、イチヤイチャしながらさ。

こうして弾いて、歌うのが獅子舞の曲なのさ。

おやつ、向いの小山の紫竹竹を、枝節を揃えて、
細かく切り出すのは、十七才の娘さん、
それを艶出しさせる室に運んで、入口でお昼寝か。ああ、
それで、美しい年頃になった女を夢見ていらっしやるのね！

見渡せばー、見渡せばアア、西も東も、美しい顔ばかりだ！どこを見ても賑わう人の山、人の山だよ。

おお、波のように打ち寄せて、どんどん来ているぞ。

男も波、女も波のように絶え間なくやってくる。

反対に行こうとしている人達は、逆巻く水のように、

面白い動きをしている。面白いものだねえ。

どうだ、こんな具合に晒した細布を、両手に波のよう畝らせて

踊ってみせているけど、「お花」もたっぶり頂いたし、

そろそろ、お時間だ。

お見せしている細布を手をクルクルつと巻いて、

おっと、越後上布の細布を手でクルクルつと棹に巻いて、

さあ、帰ろうつと、親方が泊っている仲間（すみか）の住家へ。

令和六年六月二十四日

大中臣正比呂 拙訳